

論文

台湾の互助慣行 —日本との民俗社会学的比較—

恩田 守雄

1. 序

本論文の目的は筆者が2013年以降行った台湾の聞き取り調査から、相互扶助に関わる社会慣行を明らかにすることである⁽¹⁾。始めに日本の田植えや稲刈り、屋根の葺き替えなどで主に労働力を交換する互酬的行為のユイ、共同作業や共有地（コモンズ）の維持管理などでヒト（労働力）やモノ（物品）、カネ（金銭）を集約しその活用した成果を分かち合う再分配的行為のモヤイ、冠婚葬祭で相手から見返りを期待しない支援（援助）的行為のテツダイについて（恩田, 2006）、それぞれ該当する台湾の互助行為を取り上げる。台湾にはもともと居住している原住民族と中国出身の台湾人で生活習慣が異なるためそれぞれ分けて考察している⁽²⁾。また大陸中国との違いに配慮し、さらに日本のシマ社会と比較するため島嶼地域を調査することで、伝統的な互助慣行を浮き彫りにするとともにその変容過程を跡づける。最後に台湾の互助社会の将来を展望する。日台両国の互助慣行の類似点と相違点を通して、本稿が東アジアにおける人と人とのつながりや絆について考える契機になることを期待したい^(*)。

2. 台湾の互助慣行

(1) 互酬的行為

① 台湾人

（台湾本島）

台南市歸仁区民生の60代の男性によると、昔は米や竹の子をつくっていたが、3、4ヶ月前の災害で今は農業をやめている（2013年9月聞き取り）。農作業の手助けについて聞くと、「換工」（ファンゴン）は大陸の中国で使う言葉でここでは使わず、手作業の稲刈りでは「幫忙」（パンマン）の言葉を使ってきた。台南駅からバスで30分ほどの

近郊農村で、既に機械化が進行しかつての互助慣行は少ない。台東県海端鄉利稻村の標高1600mの丘陵地帯に棚畑が広がる農村では、30代の男性がキャベツとウーロン茶の他に粟やトウモロコシ（玉米）も栽培していることを話してくれた（2013年9月聞き取り）⁽³⁾。山岳地帯では村内の集落が離れ、また家と家が遠いため台湾人どうしの相互扶助はそれほど強くないが、後述するように原住民は葬式や結婚式でよく集まり結束が強い⁽⁴⁾。

宜蘭県蘇澳鎮南成里では8歳のとき日本語を習ったことがある70代の女性によれば、「換工」についてはあまり聞いたことがない（2013年9月聞き取り）⁽⁵⁾。太平洋に面し近海および遠洋漁業の基地でもある同じ鎮の60代の男性は「換工」は農作業で使われてきた言葉で、自分たち漁師では使わないと言う（2013年9月聞き取り）⁽⁶⁾。日本のユイも農作業を中心に農村で使われる言葉で漁村では聞かないのと同様である。

新竹県新埔鎮照門里の60代の男性によると、「換工」は梨やみかん、文旦など果物の収穫でお互い労働力を提供し合うとき使う（2013年9月聞き取り）⁽⁷⁾。この地域は他にバナナなどの果物、青物の野菜、竹の子などが獲れるが、加齢とともに体が弱ってくると農作業では雇い人の「代工」（ダイカン）を使うことがある⁽⁸⁾。なおこの地区では日本同様後継者不足が深刻で人口流出も大きい。桃園県新屋郷大坡村の70代の女性によれば、20年ほど前までは「換工」という言葉も使われていたが、機械化によって今は聞くことがない（2013年9月聞き取り）⁽⁹⁾。この地域でも若者が都市に出ることが多く、休耕田が増えて野菜や家禽含め農業の後継者がいないことが問題になっている。

（島嶼地域）

澎湖県西嶼郷小門村の60代の村長によると、澎湖島の漁業ではかつて家族中心の一つの船に7人から8人くらいで乗り込みお互い助け合って漁をしてきたが、今はインドネシア人、フィリピン人、ベトナム人、タイ人など外国人労働者を雇った個人単位でサワラなどを獲っている（2014年3月聞き取り）⁽¹⁰⁾。漁業では農業のような労力交換は少ない。同じ郷にある竹彎村の60代の元小学校校長によれば、「換工」は農作業で使われた言葉で、現在もピーナッツなど自家用作物ではお互い助け合うことがある。ただし漁村ではこの言葉は使わないと言う（2014年3月聞き取り）⁽¹¹⁾。漁業では船主がパートナーとして地元住民を船長や船員として雇用するが、近年は外国人労働者を雇うことが多い。これは他の地区とも共通するが、同じ漁村内の雇用による相互扶助ではなく、低賃金の外国人労働者を雇用する点で漁業のほうがより資本主義化していると言えよう。

台東県の緑島郷中寮村の60代で30年以上小学校で教えていた元男性教員によると、緑島は漁業と農業ともに行われているが「換工」についてはあまり聞かない（2014年3月聞き取り）。同村の60代の村長は漁師をしていたが、「換工」という言葉はあまり聞かない。船は3人から4人で乗り、魚の売り上げは持ち主が4割、乗組員が6割取る。澎湖島同様今はベトナムやインドネシアなどの外国人労働者が多く、言葉ができない点が不便だと言う（2014年3月聞き取り）。

金門県金城鎮金水里の80代の男性によれば、トウモロコシやピーナッツをつくる農作業で「換工」を親戚どうしでする（2014年8月聞き取り）。島の生活が貧しく他人を手助けする余裕はなかったが、子供がいない高齢者には食物を与えたりした。

②原住民

（台湾本島）

台東県海端郷利稻村の40代の男性によれば、ここはブヌ族の村だが自分はプヌマ族で小学校の教員として5年ほど前に来たと言う（2013年9月聞き取り）⁽¹²⁾。原住民はお互いに助け合うことが多く、ブヌ族の60代の代表（頭目）はトマト、ピーマン、キャベツまたお茶や米をつくる農作業で、今日はこの家、明日はこちらの家というように「換工」という言葉でお互いに手助けしている（2013年9月聞き取り）⁽¹³⁾。これは一定の組内で労働力を回していく日本の集团的ユイに近似するが（恩田, 2006）、手助けを受ける家は大量のご飯を用意して饗応するのが普通である。なお稲の借り入れは「収穫」という日本語を使うなど、台湾統治期の生活用語が部族の中に浸透している。

花蓮県玉里鎮東豊里のアミ族40代の男性によると、自分の父親の世代では「換工」はあったが、今はお金を支払い機械を借りて田植えや稲刈りをする「代工」という言葉を使うことが多い（2013年9月聞き取り）⁽¹⁴⁾。有機栽培では雑草を取ったりするが、自分のところは農薬を使い雑草がはえないようにしている。同じ鎮の楽和里の70代アミ族の頭目の男性によれば、30年くらい前は「換工」という労力交換をしていたが、今は上記同様「代工」という言葉が使われている（2013年9月聞き取り）⁽¹⁵⁾。同じ鎮にある春日里の60代アミ族里長の男性は山の畑で竹や果実を植えるとき「換工」という言葉を使うが、苗を植えるときや稲刈りときには言わない（2013年9月聞き取り）⁽¹⁶⁾。なお平地で雑草を刈るときにもこの「換工」を使う。同じ県の秀林郷富世村の70代タロコ族の男性によると、トウモロコシやピーナッツ、フルーツの種を播くとき、「換工」という言葉を使う（2014年8月聞き取り）。また友達の手を借りてする力仕事でも言う。

南投県魚池郷日月村のサオ族80代の女性によれば、「換工」は米の収穫のとき使ったが、今は畑作もなくなりこの言葉を使うことはない（2014年8月聞き取り）。

（島嶼地域）

台東県蘭嶼郷の東清村と野銀村の村長を兼ねるヤミ族50代の男性によれば、蘭嶼島の漁業ではトビウオや深海魚、農業ではイモや白菜などの収穫はあるが、「換工」という言葉は使わない（2014年3月聞き取り）⁽¹⁷⁾。なおこの島には「青年会」という防災や安全対策などの役割を担う18歳から入会できる若者組がある。台風で被害に遭った屋根の修理なども、この「青年会」が行う。野銀村には10年以上前に分校があったが、今は東清村の小学校一つだけで、台湾本島屏東出身の40代の校長によると学校の子供たちはすべて原住民で、ヤミ族の言語を含む文化を2割ほど教え、あとは台湾本島のことを教え

ている（2014年3月聞き取り）。しかし前者を5割くらいにしてもっとヤミ族の男の子なら魚の獲り方や泳ぎ方、女の子なら野菜の育て方など原住民の文化について子供たちを知ってもらいたいと言う⁽¹⁸⁾。能力ある人がより多くの収穫を得ているのが現状だが、その分余剰の野菜やかみやすい食べ物などを高齢者に分け与えることで支え合っている。

(2)再分配的行為

①台湾人

<共同作業>

(台湾本島)

台南市歸仁区民生の60代の女性によると、台風が去った後に道路掃除などを地域社会でするとき女性のご飯を出してもてなしをしてきた（2013年9月聞き取り）。このとき「義務工」のような言葉は使わない。農村の住民どうしで1年に1、2回旅行費用を提供することがあり、これは親睦目的が強い。共有地（コモンズ）はほとんどない。これは1948年の国民党による小作料を37.5%に下げた「375減租」とその後台湾総督府、日本企業、日本人の所有地の接収と農民への払い下げをした51年の「公地放領」、53年の「耕者有其田（実施耕者有其田条例）」によって地主の土地が小作人に払い下げられ私有地化が進み、共有地的な利用は現在見られない。

台東県海端郷利稻村の30代の男性によれば、山岳地帯では家が相互に離れているため共同作業は少なく行政に任せることが多い（2013年9月聞き取り）。この地域は高地で生活必需品は車を利用して低地から調達している。学校も歩いて子供が通える距離にないため、7キロの道を車で送り迎えしていると言う。バスは午前（8時台）と午後（15時台）1日2便あるが、車の利用が圧倒的に多い。こうした交通の利便性について行政はもっと考えてほしいという意見が強い。ここでは隣保共助の前提となる近接居住空間が成立していない。

宜蘭県蘇澳鎮南成里の70代の女性の一つの里で週1回順番に海岸の漂着物などの掃除をすることがあると言う。これはあくまでもボランティアで強制ではない（2013年9月聞き取り）。この地区にも共有地はなく、私有地と公有地だけである。同じ鎮の南建里の60代の男性によれば、この漁村では8人くらいで一つの船に乗り、船長と船員で売り上げを半額づつ分配する。海岸の清掃は地元の人や漁会（漁業協同組合）のボランティアがする（2013年9月聞き取り）⁽¹⁹⁾。

新竹県新埔鎮照門里の60代の男性によると、地域で雑草や木の葉を取るとき共同作業はあるが、そのとき出なくても特に罰金を取ることはない（2013年9月聞き取り）。すべて私有地で野菜や果物を育てているため共有地はない。桃園県新屋郷大坡村の70代の女性は地区の共同作業はボランティアの「志工」（ジカン）ですと言う（2013年9月聞き取り）。

(島嶼地域)

澎湖県西嶼郷小門村の60代の村長によれば、海岸の清掃などは村内のボランティアが行うため、必ずしも各世帯から労働力の提供を依頼するわけではない(2014年3月聞き取り)。ここでは採取解禁日があり、6月から9月までウニの採取期間を守らないと5万から6万円の罰金を科せられる。この点は日本の漁村と同じである。なお共有地を地域住民間で活用する再分配的行為の仕組みとして、周辺の無人島を村民が共同所有して貧しい人に採取権などを与える「モヤイ島」(恩田, 2006)について聞いたが、そうした制度はないと言う。貧しいのは漁をする能力の違いだとして、個人の自助努力が重視されている。これは他の島嶼地域でも同様で、共有地としての島の活用は見られないと言ってもよいだろう。同じ郷の外垵村の50代の村長によると、海岸の清掃など共同作業は1週間くらいかけて自発的に行っている(2014年3月聞き取り)⁽²⁰⁾。同じ郷にある竹彎村の60代の小学校元校長によれば、清掃などの共同作業は自分の家の前はするが各自ですることが多い(2014年3月聞き取り)。ただお寺や公共施設はボランティアが月2回ほど掃除をする。日本で見られる出ないときの過怠金が科されることはない。地域住民が社区(コミュニティ)の活動として高齢者や貧しい人の食事などの世話をしている⁽²¹⁾。

台東県の緑島郷中寮村の60代の男性によると、自分が小学校のとき各家から出て排水溝の掃除や雑草を刈ったりしたが、今は郷公所から雇った人が来て清掃をする(2014年3月聞き取り)。かつて3ヶ月に1回くらい村ごとに掃除の競争をする村民大会があり、お互い共同作業に力を入れていた時期があった。しかし同村の60代の村長によれば、今は郷公所の者が8人から10人くらいで各地域の掃除を行っている⁽²²⁾。この緑島では共助よりも公助への依存が強いことがわかる。

<「會(会)」>

(台湾本島)

中国大陆の福建省と広東省はもともと小口金融の盛んなところとして知られるが、この南部出身者の移住により台湾にもその移入がされたと言える。台南市歸仁区民生の60代の男性によれば、「互助會」(フウジュフェイ)と言って毎月1回集まり5千元出す(2013年9月聞き取り)。人数は20人くらいで友達や隣近所、親戚です。弔事や慶事に備えるというよりも利殖目的の金銭モヤイ(恩田, 2006)が中心で、将来に備えた貯蓄目的のものは少ない。お金が入用ときは親戚から必要な額を借りる。台東県海端郷利稻村の30代の男性は日本の頼母子や無尽に相当する小口金融を自分たちはしないが原住民はやっていると言う(2013年9月聞き取り)。この家の近くに住む90代の台湾人(閩南族)男性によると、ブヌン族の原住民はよくするが、自分はいない。「招會」(ジョウフェイ)と呼び、台湾人は「會仔」(フェイア)とも言うことを聞いた。

宜蘭県蘇澳鎮南成里の70代の女性は自分が小さい頃周囲の大人が「會仔」と言ってやっていたが、今はほとんどしないと言う(2013年9月聞き取り)。毎月1回集まり千

元から2千元くらい出したが、ときには5千元になることもあった。お金を必要とする会頭が集めるが、利息を一番高く出す人が受け取っていく仕組みである⁽²³⁾。これは最も利息を高く出す人が落札する「積金式」で、一番少ない受け取り額を提示して定額払っていく「割引式」とは異なる(恩田, 2006)。同じ鎮の南建里の60代の男性によれば、「會仔」は漁師仲間であつて行っていたが、持ち逃げをする人が出て「倒會」(タオフェイ)が多くなるとする人が少なくなった(2013年9月聞き取り)。なお漁会で魚の売買を行い、貯金をしてお金を借りることができる。

新竹県新埔鎮照門里の60代の男性(客家族)によると、「標會」(ビュアフェイ)を一人1万元、夫婦で参加すると2万元出して20人くらいです。受け取りは最も利息を高く出す人が受け取る「積金式」である(2013年9月聞き取り)。利息目的だが、会頭が逃げて解散する「倒會」になることもあったと言う。このため一定の財産があり信頼関係にある親戚や友人、同級生を対象にしてきた。銀行でお金を借りるとき担保(土地や建物)を取られ保証人も求められるが、「標會」ではそれらを必要としない分気軽に小金を得やすい面がある一方、それだけ持ち逃げされるリスクも大きかった。

桃園県新屋郷大坡村の70代の女性によれば、50年くらい前はお米を出して「標會」をしていたが、今は現金でしている(2013年9月聞き取り)。やり方は二種類あり、1万元を出して受取人が毎月その金額に最も高い利息をつけた人が落札し、以後1万元にその利息をプラスして出していく「外標」(フェイビュア)と、1万元に対して受け取りを少なくする額が最も大きい人が落札する「内標」(ネイビュア)がある。たとえば掛金が1万元とすると、前者は千元プラスして毎月1万1千元払い続け、後者は千元マイナスして9千元受取り以後毎月1万元ずつ払う方式である。前者が「積金式」であり、後者は「割引式」に他ならない(恩田, 2006)。この「標會」が続くことを「活會」(ホァーフエイ)、終わることを「死會」(スूर्ーフエイ)と言う。お互い信頼関係がある者どうしですが、人数は10人から30人くらいで最も多いのは20人くらいの規模である。なお人が集まるときは一般に「招會」(ジョウフェイ)と言っている。

(島嶼地域)

澎湖県西嶼郷小門村の60代の村長によると、一人5千元から1万元出してする「標會」があり、一人で一つあるいは二つと複数入る人もいる(2014年3月聞き取り)。人数は20から30人くらいですが、低い受取金額を提示した人が落札する「割引式」が多い。村長自身は昔参加していたが、今はしないと言う。村内の信頼関係が前提で、得たお金は家や船の修理などに使った。同じ郷の外垵村の50代の村長によれば、月1回会のとりまとめ役(会頭)に1万元出して40人から50人くらいで行っている(2014年3月聞き取り)。同じ郷にある竹彎村の60代の元小学校校長は月1回集まり20人から30人くらいで「標會」をする。もらう金額がもっとも低い人が落札する「割引式」で、1人1万元くらい出すと言う(2014年3月聞き取り)。これだけ銀行などの金融機関が発達

しているにもかかわらず、こうした「會」をするのは手っ取り早くお金が得られ利息がいいからと言う。過去に持ち逃げする者もいたが、親戚や隣近所の信頼関係がある人とする。貧困者を救済する目的は薄く、生活に困っている高齢者には毎月7千元支給され、バスの無料パス券がもらえるなど公助に依存している。

台東県綠島中寮村の60代の男性によると、「標會」は信頼関係にある農会（農業協同組合）の仲間や親戚で24人くらいで月一回集まり最低でも1千元出して行っている（2014年3月聞き取り）。受け取り金額が最も少ない人が掛金を定額払う「割引式」である。最初に受け取る人は最もお金を必要とする人で、不利な条件でも受け取るため高い利息を払うことになる。メンバーで受け取りが続く「活會」は全員が受け取ると「死會」になる。持ち逃げが多いため、「會」のとりまとめ役である会頭はメンバーを慎重に選ぶと言う。こうした「標會」の他に、もっと少ない金額を出して助け合う「互助會」もある。同村の60代の村長からはかつて自分の家内が入っていた「標會」で持ち逃げがあり、個人的にはよくないことを聞いた（2014年3月聞き取り）。「標會」にはきちんとした契約がないため、法律上の規則も適用できない曖昧なところがあると言う⁽²⁴⁾。こうした小口金融は何よりも利息がよく、銀行でお金を借りるときのような土地や建物を担保にする面倒な手続きが必要ないことも普及している要因である。

澎湖県望安郷中江村の60代の元中学教員の男性によれば、「標會」は人が集まる「招會」ともまた紙に金額を書く「寫會」（シーフェア）とも言って漁師が船の設備更新や修繕のために行っていた（2014年8月聞き取り）。第1期は会首が呼びかけて200元から300元のお金を集め20人から30人くらいでしたが、第2期以降一番少ない受け取り額を書いた人が落札する（割引式）⁽²⁵⁾。

②原住民

＜共同作業＞

（台湾本島）

台東県海端郷利稻村のプユマ族の40代の男性は共同作業では特に災害のとき地域住民の団結力が強くお互い支え合ってきたと言う（2013年9月聞き取り）。同村のブヌン族の40代の男性からは台風で被害を受けたときは村中で助け合い、また週1回道路の掃除をすることを聞いた（2013年9月聞き取り）。その際中国大陆のような「義務工」という言葉は使わない。土地は共有地（コモンズ）はなくすべて個人所有である。天主堂の掃除も皆ですが、他の天主教（カトリック）の人が来て手伝ってくれることもある⁽²⁶⁾。

花蓮県玉里鎮東豊里のアミ族40代の男性によれば、田の側溝は各自ですが、道路清掃は月1回共同でするなど、この地区は9割がキリスト教徒で団結力が強い（2013年9月聞き取り）。「共識」（ゴンシー）という連帯と共生の意識が見られることも語ってくれた。同じ鎮の楽和里の70代アミ族頭目の男性によると、安通社区（部落）では道路清

掃や環境美化など月1回ある共同作業を頭目が拡声器を使い地域住民に知らせる（2013年9月聞き取り）。一家から一人出るが、出ないと千元払う。かつての共有地には天主堂が建ち現在教会の所属になっている。同じ鎮にある春日里の60代のアミ族里長の男性からは、共同作業は「義工」（イーカン）という言葉を使うことを聞いた（2013年9月聞き取り）。これはボランティアでする行為の「志工」とは異なる。自発的な環境整備の共同作業には「環境志工」がある。特に教会のメンバーが周辺の掃除をする。この里では共同作業を通して民族間の融和もはかっていると言う⁽²⁷⁾。かつて共有地が1960年代の初め頃まであったときはその土地で獲れた農産物を売って得た現金を皆で分配し、また旅行費用や集会所の修繕費に充当してきた。個人の意識ではこうした共同作業は大切だと思っているが、若者が減り現在この種の共助が弱くなっていると言う。

同じ県の秀林郷富世村の70代タロコ族の元牧師によると、共同作業では特に決まりはないが、出ないと罪悪感から最高で1千元くらい出すことがある（2014年8月聞き取り）。なお山岳生活では早く開墾した人が土地を得るため共有地はなかった。生活に困っている人には米やイモを分け与えたが、基督教（プロテスタント）の教会の力を借りて弱者を手助けしてきた。

（島嶼地域）

蘭嶼島の東清村と野銀村の村長を兼ねるヤミ族の50代男性によると、村の共同作業は郷会所によってつくられた社区発展協会で告知し、ボランティアで掃除などをする（2014年3月聞き取り）。旧日本軍の跡地を利用した政府の保留地では、土地を持たない人が申請して無料で保留地を借りてイモや野菜を育てることができる⁽²⁸⁾。これは公助としての公有地の有効活用だが、この保留地が事実上地域住民の共有地（コモンズ）として生活困窮者救済の役割を果たしていることがわかる。なお貧しい人がいれば、住民間でイモや野菜、魚をあげて助け合うことがあると言う。

蘭嶼島内で見かけた「台東懸蘭嶼郷朗島社區發展協會」の標識はその土地が保留地として島民に活用されていることを示している。この近辺で農作業をしていた50代の男性からは隣の土地は郷有地で申請すれば誰でも種を植えて土地を利用できることを聞いた（2014年3月聞き取り）。自分の土地は先祖から受け継いだ私有地で、今はイモを作っている。かつてこの島は水源が大きな問題だったが、給水塔ができてからよくなっている。地域住民の支え合いは困窮者に野菜や魚をあげる行為に見られたが、今は政府が低収入の人に対して道路工事などの雇用をつくり毎月5千から6千円の収入を得させていると言う。この農民は台湾本島で靴を作る技術を身につけ島に戻ったが、25歳のとき子供たちの安全を守るため「青年会」を立ち上げた創設メンバーの1人で、この朗島村で最初に「青年会」ができたと言う。同島の野銀村の60代男性によると、「青年会」は20歳から35歳くらいまでで女性もいるが男性が多く、村内の祭りなどのイベントで中心的役割を果たしている（2014年3月聞き取り）。なお村では原住民どうしの結婚が多く、台湾本

島人との結婚は少ないため独自の文化は継承されているが、やがてヤミ族の文化が失われていくことを心配している。

<「會（会）」>

（台湾本島）

台東県海端鄉利稻村の40代プユマ族の男性によれば、必要なお金は親戚から借りるので「會」については聞いたことがない（2013年9月聞き取り）。しかし同村のブヌン族の年配の女性は「招會」や「互助會」のような漢族と同じ名称の「會」のことを聞いたことはあるが、昔も今も自分には行っていないと言う。同じ原住民の60代の頭目（代表）によると、この集落では農会が農機具などの購入の補助金を出してくれることもあり、「招會」はしない。

花蓮県玉里鎮東豊里の40代アミ族の男性によれば、「標會」は昔あったが持ち逃げする人が多くなりする人が少なくなった（2013年9月聞き取り）。しかし同じ鎮の樂和里の70代アミ族の頭目は日本語の頼母子という言葉は今も使い行っている。20人くらいで集まり1万元出すと言う。一番利息を払う人が入札する「積金式」である。得たお金は生活用品に使うが、信頼できる隣近所の人や同郷の人で月1回集まる。同じ鎮にある春日里の60代のアミ族里長の男性によると、天主教では「互助社」（フウジュシエ）という組織を通してお金を貯めて低い利息で借りることができる（2013年9月聞き取り）。その一方で頼母子について聞いたこともあるが、今年2回米が獲れるため6人くらいで半年に1回米を一人20袋出してすることがある。なお日本語の頼母子について聞いたことがあると言う。同じ県の秀林鄉富世村の70代タロコ族の元牧師もまた聞いたことがあり、もともとは生活に困っている人を助けるために「標會」をしたと言う（2014年8月聞き取り）。今も友人に誘われると1回3千元から4千元かけてするが、給料のいい公務員では一万元くらい出している。

南投県魚世鄉日月村のサオ族60代の女性によると、「標會」の仕組みは知っているが、皆生活が貧しく生活に余裕がなかったからしなかった（2014年8月聞き取り）。

（島嶼地域）

蘭嶼島の東清村と野銀村の村長を兼ねるヤミ族50代の男性は、この東清村では「會」をすることはなく必要なお金は自分で貯めると言う（2014年3月聞き取り）。

(3) 支援（援助）的行為—幫忙

① 台湾人

（台湾本島）

台南市歸仁区民生の60代の女性によると、結婚式や葬式の手助けで「幫忙」（パンマン）の言葉を使う（2013年9月聞き取り）。この他新年では神様にお祝いをするときにも手助けをする。かつての農村は工業化され、しだいに喜びや悲しみの共有も少なく

なってきた。年長者にはまだこうした喜怒哀楽の共感が残っているが、若者では少ないと言う。この地域では農産物の価格が仲介業者を通すため低く儲からない点、また年々若者の流出が多いことが問題だと指摘している。

台東県海端鄉利稻村の40代ブヌン族の男性によれば、葬儀は天主教式で地域住民が手助けして行う（2013年9月聞き取り）。かつては墓穴を掘り石を載せて埋める土葬だったが、今では火葬も一部ある。こうした相手から見返りを期待しない行為を「幫忙」と言う⁽²⁹⁾。宜蘭縣蘇澳鎮南成里の70代の女性によると、「幫忙」で葬式も結婚式も隣近所の人に来てお金を出した（2013年9月聞き取り）。これに対して手助けを受けたほうではご馳走でもてなしをする。葬儀では1週間死体を安置して山へ運び土葬した。同じ鎮の南建里の60代男性は葬儀や婚儀で「幫忙」は見られるものの、しだいに業者に任せることが多くなってきたと言う（2013年9月聞き取り）。

新竹縣新埔鎮照門里の60代の男性によれば、昔は「幫忙」で葬儀も結婚式も地元でしたが、今は業者を利用することが多い（2013年9月聞き取り）。かつての葬儀は遺体を10日間安置し火葬と土葬が半分くらいあったが、土葬が面倒なときは火葬で瓶の骨壺に骨を入れたと言う。桃園縣新屋鄉大坡村の70代の女性からも、「幫忙」でお互いに手助けしてきた土葬が火葬になり、10年ほど前から結婚式も業者に任せることが多くなったことを聞いた（2013年9月聞き取り）。

（島嶼地域）

澎湖縣西嶼鄉小門村の60代の村長によれば、1970年代頃まで葬儀も婚儀も地域住民どうしで行ってきたが、現在は交通機関が便利になり澎湖縣の中心都市馬公で業者を利用してすることが多い（2014年3月聞き取り）。同じ郷の外垵村の50代の村長によると、かつて地元で行っていた葬式も結婚式も今は業者を通してするようになった（2014年3月聞き取り）。同じ郷にある竹彎村の60代男性の元小学校校長からは葬儀も婚儀も昔と違い業者に任せるようになったが、結婚式で変わってないのはお祝いのクッキーを持参することを聞いた（2014年3月聞き取り）⁽³⁰⁾。

台東縣綠島中寮村の60代の男性によれば、「兄弟会」という7人から8人くらいの組織が葬式の世話をしてきた（2014年3月聞き取り）。結婚式では以前は近所で料理のできる人が島にはない素材を台東まで買いに行きビーフンなどを作ったが、今はレストランで会食することが多い。同村の60代の村長によると、かつては木で棺桶をつくったが、今は業者に任せている。結婚式も業者の利用が多いが、澎湖島同様ピーナッツでクッキーを作り隣近所に配ることはまだ行われている⁽³¹⁾。

金門縣金城鎮金水里の80代の男性は若い頃貧しく葬式も結婚式も十分でなかったが、近隣の人が手助けしてくれたと言う（2014年8月聞き取り）。家が狭くお寺に泊まる事もあり、農作業で忙しく人とのつながりも強くなかった。しかし今の生活は余裕がある分近隣のつきあいも多いと言う。

②原住民

(台湾本島)

台東懸海端鄉利稻村の40代プユマ族の男性によれば、冠婚葬祭では親戚が集まるが、天主教徒であるため週1、2回は集まって喜びや悲しみをお互い分かち合っている(2013年9月聞き取り)。花蓮県玉里鎮東豊里の40代アミ族の男性によると、多くの教会で葬式や結婚式をするとき、皆が「幫忙」という言葉で手助けをする(2013年9月聞き取り)。同じ鎮の樂和里の70代アミ族頭目の男性から葬儀では米や野菜をもっていくが、カセイを「幫忙」と同じ意味で使っていることも聞いた(2013年9月聞き取り)。このカセイは日本語の加勢で、年配の人がよく日本語を話せるという事情も加わり、頼母子同様日本統治時代の影響が強く残っている⁽³²⁾。同じ鎮にある春日里の60代アミ族里長の男性によれば、葬式では親戚が多く集まり手助けをするが、故人の人脈が大きいほどそれだけ多くの弔問客が集まる(2013年9月聞き取り)。しかし天主教会の式では参列者はそう多くないと言う。同じ県の秀林郷富世村のタロコ族の70代元牧師は葬式や結婚式では教会の信者を集めて協力を呼びかけるが、「相互幫忙」(マダダヤウ)の精神で建物の新築や木の伐採で手助けしてきたことを話してくれた(2014年8月聞き取り)⁽³³⁾。

南投県魚池郷日月村の60代サオ族の女性によると、結婚式では豚やイノシシ、牛を殺して檳榔(ヤシ科の植物)を用意して祝ったが、今はケーキを準備して漢人と習慣が近づいてきた(2014年8月聞き取り)。葬式では泣かないようにしてむしろ喜んで送り出したと言う。

(島嶼地域)

蘭嶼島の東清村と野銀村の村長をするヤミ族50代の男性は結婚式は同じ島出身者どうしの結婚があるため地元の教会ですることが多いが、そのときの食事は業者に頼ることが多くなったと言う。葬式はまだ土葬が行われ、手間暇がかかる分手助けも多くされている⁽³⁴⁾。

3. 日本の台湾統治時代の互助慣行

(1)台湾固有の互助慣行

<台湾人>

日本の植民地統治の必要性から臨時台湾旧慣調査会が行った調査報告書を通して台湾統治時代の互助慣行について見ることにしたい。台湾人については『臨時台湾旧慣調査会第一部調査第一回報告書』(1903-7年)に法律を中心に紹介されている⁽³⁵⁾。この第1回の報告書(上巻)では「義倉」の記述がある(臨時台湾旧慣調査会編, 1903, 452-455頁〈上巻〉)。中国の朱子が始めたとされ日本にも伝えられたが(恩田, 2006), 台湾にも凶作に備えた貧民救済の制度があった。それは「社倉」とも呼ばれてきた。ただし

台湾総督府は明治32年に義倉穀を罹災救助基金に組み入れ、事実上公認された制度としてはその後存続していない。これらは官主導の監督下に置かれたとは言え、出資はあくまでも民間の義捐^{ぎえん}が中心であった。台北地区では単なる「義倉」だけでなく子弟教育も援助する「義学」も加えた明善堂がつくられた。「義倉」は毎年新穀と交換し凶作の年に騰貴すると売るが、それも一定の価格以下では売らない規則まで設け、貧民救済の方策として万全を期した民設の財団であった。

この他特筆される公助に近い共助の仕組みとして「義渡」がある。これは河川の通行に際して不当な通行料を収受することが多く通行の妨げになっていたものを無料で渡ることを認めた言わば監視制度であった（臨時台湾旧慣調査会編，1903，455－458頁〈上巻〉）。公共事業の一種として台湾内の数カ所に架橋し「義渡」を設立している。さらに貧困者の死体埋葬地を用意した「義塚」もあった（同上，459－461頁）。これは身寄りのない死者を埋葬する土地を供与するもので土地は寄付に基づいていた。さらにこの「義塚」に敷設した土地を田業として活用した「義塚田」の収益を管理費用に充当する、あるいは家屋を併設して医療施設とすることもあった。

公助に関連する「公業」についても紹介している（臨時台湾旧慣調査会編，1903，461－466頁〈上巻〉）。この「公業」は個人で行う「私業」ではなく、複数の力を合わせた享益者が多数ある場合の事業を意味する。たとえばそれは祖先伝来の土地^{しゅつえん}を出捐した宗族の祭祀事業などで、同族の一体感を保つ目的があった⁽³⁶⁾。これは子孫の貧窮者を救済し学業支援を行う制度でもあった。韓国の同族の契にも類似した組織があった（恩田，2012）。そのより強い公益性は「共業」に示される（臨時台湾旧慣調査会編，1903，466－470頁〈上巻〉）。「共業」は直接には共有の財産をさすが、公業地では管理者がいるのに対して共業地では連名による管理がされる。この共有関係を示す言葉に「公家」、「和合」、「合股」、「合夥」、「連財」、「合置」、「合建」、「公有」などがあった。このうち「公家」は主として漳州人が「和合」は泉州人が用いる福建省出身者の言葉で、その関連言葉の「合股」、「合夥」、「連財」は合資の意味が強く組合あるいは会社の意味になるが、「合置」、「合建」は主として不動産に用いる言葉とされる。「共業」に最も近い意味をもつ言葉が「公有」とされたが、これも国家やその他の団体所有の意味に解釈されている（臨時台湾旧慣調査会編，1903，466－467頁〈上巻〉）。日本語の「共有」が最もふさわしいが、この言葉は第1回の報告書では見当たらない。「共業」の原因として資本共同の組合、商人の合資組織に加え、船や墓地、水牛、豚の共有という共同取得や隣接する井戸の立地も指摘している。この「共業」による使用収益は平等に分配されるが、^{こぶん}股分（持ち分）に応じた配当がされ、その処分は共有者優先である。これらは地域住民間というより親戚や朋友、知己の間の共有で、そこには中国本土同様家族を単位とした「個人主義」（家族的個人主義）が見られるように思われる。

第2回の報告書第1巻（1906年）では「共業」に代わり「共有」として資本関係で株

を意味する股がつく「合股」、商業組合で用いる「合夥」の他に、地域住民間では漁業関係（魚塩）の共有や土地（田園）の開墾で共有が紹介されている（臨時台湾旧慣調査会編，1906，770－775頁）。海は沿岸部の土地の所有者に、その土地が共有の場合は海も共有になるが、井戸は隣接する者の共有で「公井」と言い、また「水井半口」という言い方は半分利用する権利があることを示している。いずれにしても地域住民全体の共有関係はきわめて希薄で特定の地域住民間の共有であることがわかる。同報告書第1巻には、同族が子弟のために田園その他の財産を提供しその土地から得た収益を勉学や学位取得の費用に充当する慣習を紹介している（臨時台湾旧慣調査会編，1906，518－520頁）。この財産を「書田」と言い、そこから生じた収穫（租谷）を「育才租」あるいは「学谷」と称している。これは一般に他人の所有物を一定の人のために利用する人的役権（人役権）の項目で扱われている。同報告書の第2巻（上巻）では、地域住民間でお米や現金などを出して葬儀費用を支援する「父母会」の記述がある（臨時台湾旧慣調査会編，1907，284頁〈上巻〉）。

<原住民>

原住民については、第一級の資料である臨時台湾旧慣調査会編の『臨時台湾旧慣調査会第一部蕃族調査報告書』（1913－14年）と台湾総督府蕃族調査会編の『台湾総督府蕃族調査会蕃族調査報告書』（1917－21年）で各部族別に社会組織、宗教、住居、生活状態、人事（結婚、葬喪）、身体特徴などが紹介されている。また臨時台湾旧慣調査会の『蕃族慣習調査報告書』（1918，1920－29年）には農業の耕作や収穫、共同所有の記述がある。こうした官制の「蕃族研究」に対して、ここでは大正6年に発行された森丑之助の『臺灣蕃族志』（第一巻）も一人の在野研究家の調査による貴重な報告書として原住民の互助慣行について参考にし（森，1917），また台湾の生活様式については伊能嘉矩の『台湾文化史』（上巻・中巻・下巻）も参照した（伊能，1928）。

各民族の社会は蕃社と称され、一社が一つの血縁団体から成る場合もあれば、複数の血縁団体からつくられることもあった（森，1917，145－150頁）。蕃社は共姓団体（同族）を原則とする。アミス族（花蓮）では蕃社の共有地として狩場があり、ここでは火入れによる鹿や兎の狩猟を行い、その分配は一社連合や社内同級者の猟団で第一撃を加えた者は野獣の頭蓋肋骨5枚目までの肉、また二番手は前脚1本、獲物を発見した犬の持ち主には後脚2本などを与え、その他残りは猟員に平等に分配したとされる（臨時台湾旧慣調査会編〈第2巻〉，1918，40－44頁）。こうした共益志向は海での漁になると個人単位の漁獲が多くなるものの、河川では社民共同で行うこともあった（同上，44－48頁）⁽³⁷⁾。

『蕃族慣習調査報告書』の第4巻によると、阿里山周辺に居住するツォウ族では土地が基本的に各部族内の宗族団体の共同所有による管理がされ、相続権はなく使用権のみが認められる（臨時台湾旧慣調査会編〈第4巻〉，1918，210－229頁）⁽³⁸⁾。その土地か

らの収益は宗族の各家に分配されるが、社の大小によってその多寡が生じることがあり、また収益が大きくないときには宗族全体に分配することはなくその土地の使用者だけで分有する。獵場や溪流、山林も同様の共同管理だが、その採取は個人あるいは集団の収益を認めている。住居を含め宗族の各団体の所有であることから、そこには共有地（コモンズ）をもつ共同体的な営みがあったことがわかる。しかしやがて資本主義的な土地所有の制度が浸透するにつれ、個人所有の私有地化が進行してくる。既述したように1953年の「実施耕者有其田条例」により耕す者が土地をもつという原則によって地主から土地を政府が買い上げ小作人に払い下げるが行われた。こうした新生台湾の一連の土地改革が原住民にも影響を与えたことが予想される。

台湾原住民調査の古典とも言える森の『臺灣蕃族志』（1917年）では、かつて狩猟をしていた北部の原住民タイヤル族では数個の血族団体が集まり獵場を共有し出獵に際して一致団結した行動をとっていた。この狩猟団体では獵手が一定の獲物を得る権利を有するが、団員間で平等に獲物を分配し出獵しなくてもその獲物を受けることがあった（森, 1917, 147頁）。これは日本の漁村で獲た魚を漁師だけでなく、漁村内で分け合う「代分け」の慣行と近似するが、日本でも山村の狩猟で見られた。台湾の狩猟団体は非常時には軍事行動を共にする集団であった。なお『臺灣蕃族志』の付録として収録された「臺灣蕃族に就て」のところで、森はブヌン族が最も獐猛な兇蕃とし、最も従順で平和的な民族としてアミ族をあげている（森, 1917, 付録9頁：12－13頁：14頁）。早くから外来者の統治に服した民族は熟蕃あるいは平埔蕃とされ、抵抗した蕃人は高地に退いたため生蕃あるいは高山蕃と言われた。後者のブヌン族は一軒の家に60人から80人も住んでいた大家族制で、個々人の身体能力が高く長時間の労働にも耐え貯蔵庫（穀物倉）には3年分の蓄えがあるほど部族内の団結力が強かったとしている。日本統治に最後まで抵抗したブヌン族は首狩りの風習を強くもっていたが、それだけ戦闘性に富むことは逆に集団としての凝集性が高く互助慣行も強かったことが想像される。

(2)小口金融に見る互助慣行の移出入

小口金融の盛んな中国大陆の福建省と広東省の移住者から成る台湾はその移入が多くされてきた。日本統治期との関係では互助慣行それ自体の移出入というよりも、統治期の日本語教育の普及による生活用語の受容が散見される。その一つが頼母子である。台東県海端郷利稻村の高地に避暑で来る90代の男性は日本の頼母子について知っていた（2013年9月聞き取り）⁽³⁹⁾。既に述べたように「標會」（ビュアフェイ）が主として用いられるが、頼母子を知っていた閩南族の台湾人は日本人から教えてもらう前からその仕組みがあったと言うことから、頼母子という言葉だけを聞いたものと推測される。しかしその一方で島嶼地域では澎湖県西嶼郷小門村の60代の村長は日本の頼母子という言葉は聞いたことがない（2013年9月聞き取り）。台東県綠島中寮村の60代の村長もその言葉

を知らないと言う（同上聞き取り）⁽⁴⁰⁾。

原住民では、花蓮県玉里鎮楽和里の70代アミ族の頭目は頼母子という言葉は今も使っている（2013年9月聞き取り）。また同じ鎮の春日里の60代のアミ族里長も頼母子という言葉を知っていることがある。『臺灣蕃族志』で森が最も穏やかな民族としたアミ族は日本に早くから同化した民族で人口が多い分日本人との接触も多かったため、日本の風俗習慣の移入も日本語を通してされてきたものと思われる。またこの男性から日本語のカセイを「幫忙」と同じ意味で使っていることを聞いたが、この点からも日本統治時代の影響が強く残っていることがわかる。しかし島嶼地域の原住民は総じて「會」をすることがなく、蘭嶼島の東清村と野銀村の村長を兼ねる50代ヤミ族の男性も頼母子という言葉を知ることがなかった。

この他日本の台湾に対する直接統治による生活用語の浸透という点で、台東県海端郷利稻村のブヌン族では稲の借り入れに「収穫」という日本語を使っている。この近くの池上米は有名で「池上便當（当）」がよく知られているが、この弁当も日本から入った生活様式である。先に述べた花蓮県玉里鎮楽和里のアミ族では頼母子の言葉同様、カセイを「幫忙」と同じ意味で使うなど、日本の生活用語が今もなお部族社会の中に浸透している。さらにこの楽和里の安通社区（部落）では道路清掃や環境美化などの共同作業に一家から一人出るとき、それに出ないと千円払う。過怠金の制度が他の地区では見られないことから、これは言葉ではなく早くから日本社会に同化したアミ族の原住民が日本統治期の隣保共助の慣行を踏襲したものと考えられる。

4. 日本と台湾の互助慣行の比較

(1)日台互助慣行の共通点

日本ではユイ、モヤイ、テツダイという言葉で示される互酬的行為、再分配的行為、支援（援助）的行為は地域によってまた台湾人と原住民で異なるところもあるが、台湾でもそれぞれ該当する言葉が見出された。互酬的行為は台湾では中国大陆同様主として農業で「換工」（ファンゴン）という言葉が用いられてきた（表1：「日本と台湾の互助慣行（言葉）の比較」参照）。この言葉は果物やピーナッツなどの農作業で使われ、緑島のような島嶼地域の漁村では「換工」という言葉は聞かない。これに対して原住民はトマト、ピーマン、キャベツまたお茶や米をつくるとき「換工」で手助けしてきたが、しだにお金を払い機械を借りて田植えや稲刈りをする「代工」という言葉が使われるようになった。機械化とともに「換工」も減少したが、手間を要する領域ではまだ使われている。山の畑で竹や果実を植えるとき使うが、田植えや稲刈りのときに言わない地域もある。ヤミ族の蘭嶼島では独自の生活様式が維持されてきたが、漢人の「換工」という言葉は使わない。

表1：日本と台湾の互助慣行（言葉）の比較

	日 本	台 湾
互酬的行為	ユイ	換工（農業中心） 代工
再分配的行為	モヤイ	志工 義工（台湾本島原住民の一部）
	金銭モヤイ（頼母子、無尽）	標會（台湾人） 頼母子（台湾本島原住民の一部）
支援（援助）的行為	テツダイ（カセイ）	幫忙 カセイ（台湾本島原住民の一部）

再分配的行為では、台湾人は社会主義の中国大陆で使われている「義務工」という言葉を使うことは少なく、「志工」（ボランティア）として共同作業が行われている。道路の補修や海岸の清掃などは自主的に行われ、出ないときに過怠金が科されることはない。原住民では民族および部族間の結束が強いため、共同作業では逆に「義工」としての参加を求められ、この義務に反して出ないと罰金が要求される。アミ族では道路清掃や環境美化などの共同作業に一家から一人出るが、不参加の場合千元払わされる。日本でもこの種の過怠金制度は見られるが、今回の聞き取りの範囲では台湾人にこの制度はなかった。日本の頼母子や無尽に相当する金銭モヤイでは、「標會」（ビュアフェイ）がその典型的な言葉として使われている。台湾本島の原住民はこうした金銭モヤイをするが、島嶼地域の原住民は行わない。この点は日本の沖縄本島や宮古島、石垣島でモヤイは多く見られるが、人口が少なく人間関係が濃密な鳩間島など小さな島では見られない点と共通する。もっとも生活が極端に貧しく「標會」をする余裕がなかったことも指摘できる。

支援（援助）的行為では、台湾人も原住民も結婚式や葬式で「幫忙」（パンマン）の言葉を使い手助けする。相手から見返りを期待しない一方向性（片助）の行為だが、手助けされたほうはご馳走でもてなしをすることが少なくない。いずれも葬儀や婚儀がしだいに簡素化しそれだけ他者の手を煩わせることがなくなる一方、面倒なお返しを避けることもあり業者の利用が多くなっている点は日本と共通する。

かつての共同作業を行政に任せる公助は台湾人原住民ともに多く見られ、その分地域社会の共助が減少しているのは日本と同じような状況にある。森が『臺灣蕃族志』（1917年）の付録「台湾蕃族に就て」で述べているように、調査をした明治、大正時代でさえ台湾原住民の生活様式がしだいに失われることに対する危機意識が蕃族調査を行った一つの動機であることを考えると、いつの時代もそれなりの近代化の波が伝統的な慣行を弱体化してきたことがわかる。時代によってその変容の程度は異なるが、互助慣行もそ

の例外ではない。互助ネットワークを規定する他者に対する「共（同）感」もそれだけ影響を受けるが、生活様式がどのように変わろうともその基底で変わらない感情はまだ見られる。それは東アジアに限らないが、大都市よりも地方都市、さらに地方の農村部でまだ自生的な社会秩序としての互助慣行が健在である点も日本と共通する。花蓮県玉里鎮東豊里のアミ族男性から「共識」（ゴンシー）という連帯と共生の意識や同じ県の秀林郷富世村のタロコ族の元牧師からは「相互幫忙」（マダダヤウ）という互助意識について聞いたことはこの点を裏付けるものと言えよう。なお同じかつての漢字文化圏であるベトナムでは人為的に共助を求める社会主義の影響にもかかわらず、筆者が調査した山岳民族の村落では互助ネットワークが住民間で依然として強固に残っている（恩田, 2008a: b）。

(2)日台互助慣行の相違点

台湾人の地域社会では日本のような集団の強い凝集性が見られるわけではない。中国大陆の土地はすべて「王土」なりという古来からある支那の考えにも通じる社会主義という公助への依存が互助慣行を衰退させたが、台湾では大陸への対抗意識からあるいはその反動から資本主義への過信による自助中心で集団としての凝集性に脆弱なところが散見される。しかし台湾人と原住民ではその互助ネットワークに違いが見られる。台湾人のそれは中国大陆移住者の家族を基調とした「家族的個人主義」（恩田, 2013）が浸透している一方、原住民の村落内の互助ネットワークには強固なものがあり、そこには強い「集団主義」があると言ってもよいだろう。この共助としての集団性はかつての強固な共同体としての原住民社会が大陸の社会主義による土地の公有化とは異なり、また資本主義による私有地化がまだ見られないときに宗族による共同管理が行われてきたことからわかる。

台湾は日本と同様シマ社会でありながら、中国大陆からの影響を受けた点で朝鮮半島同様「個人主義」と「集団主義」の双方を併せもっている「大陸的シマ社会」として捉えることができる（表2：「日本と台湾のシマ社会の比較」参照）。その内実は中国大陆的な「個人主義」と日本のシマ社会的な「集団主義」である。純粋な集団主義ではないという点で「準シマ社会」と言えよう。朝鮮人（韓人）という単一の民族が担う「半島精神」との違いは台湾人と原住民という二つの民族の差異が反映されている点である。もともと南の島嶼地域から移住してきた原住民の強固な集団主義の互助ネットワークはシマ社会に基づいている。大陸的な個人主義は漢人の台湾人が、またシマ社会的な集団主義は原住民が主として担っているように思われる。17世紀以降スペインやオランダの支配、さらに中国南部からの漢民族の移住による漢人化が始まり、その後日本の統治下での日本人化、戦後は再び漢人化が進行する。その独自の社会や文化が急速に変容してきた⁽⁴¹⁾。しかし植民地期においても臨時台湾旧慣調査会の『蕃族慣習調査報告書』では

表2：日本と台湾のシマ社会の比較

日 本	台 湾
<ul style="list-style-type: none"> ・シマ社会 ・集団主義 <ul style="list-style-type: none"> 閉鎖性（強い共属感情 —ウチとソトの区別） 開放性（強い受容能力—和魂洋才） 	<ul style="list-style-type: none"> ・大陸的シマ社会（準シマ社会） <ul style="list-style-type: none"> ・大陸社会の特性をもつシマ社会 ・個人主義（台湾人中心） <ul style="list-style-type: none"> 大陸社会の特性—「家族的個人主義」 中国大陸からの移住 ・集団主義（原住民中心） <ul style="list-style-type: none"> シマ社会の特性—閉鎖性と開放性 島嶼地域からの移住

依然として変わらない自生的な社会秩序としての互助慣行が残っていた。戦後は漢人化が急速に進むが、原住民の独自性は観光地化で逆に維持されてきた面も否定できない⁽⁴²⁾。

先に台湾はシマ社会と言ったが、大陸から移住してきた漢人と異なり、シマ社会の特性は島嶼地域から移住してきた原住民の民族性に基づく。紅頭嶼こうとうしよと呼ばれた蘭嶼島のヤミ族が戦闘力をもたない穏やかな部族であることを森は『臺灣蕃族志』の「臺灣蕃族に就て」で指摘している（森、1917、付録14－16頁）。難破船の略奪でヤミ族が討伐を受けたことに対して、それが実は救助するために遭難者や物品を自分たちの船に積み込んだ誤解であることを述べ、個々の蕃族の特性（蕃性）について研究する必要性を主張した⁽⁴³⁾。ここには外からの刺激を拒む閉鎖性とそれを受け容れる開放性という二つの側面をもつシマ社会の特性が示されている。それは自分たちに危害を加えそうなものに対する拒絶反応と自分たちに幸福をもたらしてくれる受容反応である。中国大陸から台湾への移住の中継地となった澎湖諸島の台湾人が海賊的行為をしてきた点に比べると、人命救助が自然な行為としてできるのはヤミ族の部族性の表れであろう。

5. 結語

総じて都市化や合理化という近代化によって伝統的な互助慣行が衰退しているのは日本も台湾も共通するが、台湾では中国大陸のような社会主義の過剰な公助による共助の衰退ではなく、その後の経済発展とともに資本主義の自助への過信による共助の減少が大きいように思われる。もちろん現在中国でも社会主義市場経済による自助への刺激が共助の衰退に結びついていることは否定できない（恩田、2013）。それでも原住民の社会ではまだ台湾人以上に結束が強く、その分互助慣行も強く残っている。台湾総督府時代の旧慣行に関する調査からは当時の台湾人および原住民ともに共助がそれなりに機能してきたことがわかる。特に原住民の村落では集団としての凝集性が強くセイフティ・ネットが張り巡らされている。この自然体の精霊と祖先の靈魂崇拜に基づく民族共同体が新たにキリスト教の受容によって宗教共同体としてさらに強化されていったと言って

もよいだろう。現に聞き取り調査をした原住民の集落では天主教やプロテスタントの教会がありキリスト教信者が少なくない。またそこでは「互助社」のような貧者救済の制度も見られた。

戦後は資本主義による経済発展が地域住民の共助、特に台湾人のつながりや絆への関心を薄くする方向に作用したとは言え、社会主義を拒んだ中国人が台湾に移住したのは都市住民が中心であった。この点で社会主義の影響を受ける前の農村の互助慣行が台湾に移入されたとは思われない。しかし中国大陆同様家族を中心とした「個人主義」(家族的個人主義)の互助ネットワークは強いものが感じられる。単なる小口金融の組織ではない日本の組や講、韓国の契のような互助組織としての性格が聞き取りをした限りでは台湾人の中に見られないのはそれだけ住民間の互助意識、特にヨコの社会関係としての地縁の互助ネットワークが強くない証左と言えよう。島嶼地域でも澎湖島の台湾人ではボランティアの「志工」があるものの、緑島の台湾人の場合道路清掃など公助への依存が強かった。原住民のアミ族では「義工」という言葉で住民間の義務意識を高めると同時に、自発的な「志工」の共助も見られた。総じて民族や部族、氏族としての集団の凝集性が強く部族の代表者である頭目を中心に連帯と共生が保たれている原住民と台湾人の社会は対照的である。

台湾はもともと原住民が最初に住み着いた土地であり、そこにスペイン、オランダの欧人化、その後中国人による漢人化、日本統治による日本人化がされた歴史的な経緯からすると、為政者の統治によって先住民の自生的な社会秩序としての互助ネットワークが変容を余儀なくされた。しかし中国大陆の社会主義のようにセイフティ・ネットを切り裂くような大きな影響はなかったとは言え、今後の急速な経済発展によってはさらに伝統的な互助慣行が衰退する恐れがある。しかしその慣行の共通部分を活かした台湾人(漢族)と原住民との民族融和による互助ネットワークの形成は国づくりとして重要な課題の一つと言えよう。

* 本論文は、平成23(2011)年度から平成26(2014)年度の科学研究費助成事業の学術研究助成基金助成金による「互助ネットワークの民俗社会学的国際比較研究」(課題番号23530679、基盤研究(C))の成果の一部である。

注

- (1) 現地調査は2013年9月と2014年3月、8月の3回行った。その際通訳として台北出身の留学生神奈川大学経営学部の中嶋晃(ヨウイクテイ)君と一橋大学国際・公共政策大学院の謝逸翔(シャイツショウ)君にお世話になった。
- (2) 台湾居住民は原住民族(以下「原住民」と本稿では称す)と移住してきた漢民族に大別され、後者はさらに17世紀初頭の明朝から清朝への移行期の政治的混乱と急速な人口爆発

により中国南部から移住した「台湾省の人々」の「本省人」と戦後蒋介石の居住に伴い移住した「外省人」に大別される。これら台湾人が西部に多いのに対して、東部の山岳地帯には原住民が集中している。台湾人は閩南（ミンナン）族と客家（ハッカ）族に大別され、前者は漳州、泉州中心の福建省出身で、後者は潮州、惠州中心の広東省出身（広東客家）である。なお大陸中国の簡略化した「簡体字」に対して、台湾は「繁体字」と言われる簡略しない文字が使われる。たとえば日本でも使われる中国の「会」は台湾では「會」が、また「竜」は日本でも使われる「龍」が用いられる。日本語の「帰」は台湾では「歸」が中国では「归」が使われる。以下聞き取りをした地名は原語を尊重し本論文が対象にする互助ネットワーク固有の言葉は台湾の言語表記にしたが、その他は日本語の漢字表記にしている。

- (3) 春（4月、5月）、夏（6月）、秋（8月）、冬（10月、11月）の季節ごとに栽培され、野菜は4月、7月、10月の3回獲れる。基隆から来た主人の奥さんは高雄出身で、その母親が30年ほど前ここに移住し自分たちも生活のため7年前に来たと言う。畑作以外に民宿も行っている。米酒が入った瓶の中にハチを入れているが、これは関節によく効き、強壮剤としてハチの巣を卵に入れ炒めて食べることが多い。
- (4) この海端郷は下馬村、利稲村、海端村、新武村、霧鹿村の5つの村から成り、村長が原住民の言い方では頭目と呼ばれ4年ごとに選出される。利稲村の人口は約200人ほどで、そのうち台湾人は約1割で多くが原住民である。平らなところから来た「平原人」という意味で原住民は台湾人をパイランと呼ぶ。
- (5) 鎮の中には6つの里があり、ここでは里が社区に相当する（南成社区）。台湾では中国同様社区が一般にコミュニティとされる自然村で、さらに隣（鄰）が集落を構成し住民意識の基本単位となっている。しかしここでは社区という言葉はあまり使わず隣（鄰）という単位もない。他の里同様老人会があり、この組織の事務員から話を聞くことができた。
- (6) 南成里同様里にあたる昭安社区という名称もあるが、地元の人は南建里という地名を使うことが多い。里長は4年任期の選挙で選ばれる。
- (7) この箭竹窩3隣（鄰）に住む男性の話では箭竹窩社区という地名は竹が多いことから名付けられた。照門里には3つの社区、17の隣があり、この社区は第1と第3、第4の隣から構成され、第3隣は33世帯ある。社区の代表である理事長は4年任期の選挙で選ばれる。隣長も選挙だが自薦もあり、最末端の住民組織として地域内の様々な情報伝達が主な仕事である。
- (8) この男性は客家族で山仕事は体力を必要とするためよくごはんを食べるが、客家族はあまりおかゆを食べることがなく、閩南族はよく食べると言う。しかし今はおかゆを高齢食としている。
- (9) 郷は鎮に相当しここでは里という単位はない。郷の中には23の村があり、この村が他の地域では社区に相当する。この大坡村には9つの隣（鄰）があり、聞き取りをした女性は第5隣に住む。村長が4年任期で選挙で選ばれるのは里長と同じである。村長は行政職だが、大坡発展協会に理事長がいて社区の発展のために尽力している。
- (10) 「雨の基隆、風の澎湖島」と言われてきたように、澎湖島は風の強い島（風島）であるが、それは特に冬の東北からの強い風をさしている。平坦な地形で山はなく直接風をさえるものがないため、それだけ厳しい自然条件に島民は向き合っている。漁業以外にピーナツ

- ツなどを作っていたが、今は少なく自給自足の生活が続いている。村の人口は100人くらいで50世帯ほどある。人口減少が一番大きな問題で若者の流出は多いが、観光産業が発展すれば雇用が発生し若者が戻ってくるかもしれないと言う。なお村長の任期は4年である。
- (11) この竹彎村は人口が約千人世帯数は350ほどで、ここでも島内各地で見られる行政表記に社区がある。村の代表である村長に対して、社区では理事長という言葉が使われるのは他と同様である。両者は同じ人であることが多く、村長が政府（県や郷）からの仕事をするのに対して、理事長は人民団体のリーダーとして仕事をする事が多く、社区発展協会の中で選ばれる。なおこの元校長へのヒアリングは社区活動中心（センター）で行われた。
- (12) ここは原住民が9割で、この教員は子供たちにブヌン語を週1回教え、普段は標準語で教育している。現在の大きな問題は子供たちが地域社会から出て行き過疎化・高齢化が進行することで都市の生活様式が気に入り戻らない若者が多いが、中にはまた戻ってくる者もいる。特に狩猟民族としての「射耳祭」のときには都市に住む者も参加する。また十分な医療を受けられない問題点も指摘している。一番気になるのは親の子供の教育に対する理解が十分でないことで、農作業が忙しく勉強の面倒が見られないと言う。なお日本のいじめのような問題はなく、皆仲良くやっていることも語ってくれた。
- (13) 頭目とは部落原住民の代表である部族長で村長とは異なる。頭目の条件は皆から尊敬されることであると言う。行政制度が整備されて村長職が後から設けられた。頭目は選挙で選ばれるが、多くは推薦によって決まる。任期は事実上なく、その地位は代々継承されてきた。なおアミン族には民族の字があるが、このブヌン族には独自の字がないとされる。
- (14) この里には14の隣（鄰）があり、聞き取りをした地区は棟芬5隣で、一つの隣の人口は80人から100人くらいである。この地域は6月から7月と11月の年2回お米が獲れる。近隣の精米所では月餅とともに中秋の名月を鑑賞するときに欠かせない文旦（ザボン）の青物場が併設され、日本にも多く輸出されている。
- (15) この地域には安通という社区があり3つの隣（鄰）から成り、ここは第8隣である。社区の人口は150人くらいで、その代表である理事長は選挙で選ばれ、今は女性が理事長になっている。この頭目の案内で苗木を作る工房を視察し、そこでこの女性理事長にも会った。自然村と言える社区の住民はすべて原住民で、以前は安通部落という言い方をしていた。楽和里には全部で22の隣があり、各隣長は選挙で選ばれる。里全体では原住民と漢民族が半分くらいいる。日本統治時代に警察官をしていたお父さんから、この頭目は日本語を習い現在も少し日本語が話せる。自分の日本語名は「みずお」と言うことも教えてくれた。頭目の仕事は部落内の争い事の仲裁などであるが、隣長は行政上の仕事をする。
- (16) この行政村の春日里は人口が約1,200人で、自然村の泰林社区と春日社区に分かれ、前者が7つ後者が12の隣（鄰）から構成されている。社区の代表である理事長は人民団体によって選ばれ、ここでは隣長を理事長が指名する。隣長会議が月2回ある。この里は原住民が55%、広東省出身の客家族が25%、福建省出身の閩南族が20%くらいである。なおこの春日里には北回帰線が通っているが、日本と同じ名称が使われている派出所の正面中央にモザイク模様の幅広の線が描かれ、そこが北回帰線であることを示している。
- (17) この二つの村の人口は800人から900人ほどで、世帯数は東清村で120、野銀村で80ほどである。島にはヤミ（タオ）族の原住民が多く住み、野銀村では伝統的な半地下式の黒い木造家屋に住む者がまだいる。なおこの蘭嶼島では1982年から核廃棄物貯蔵場が運営され、

放射線の影響が懸念されている。

- (18) 奥さんがヤミ族である校長は島内北部の朗島村の小学校に18年間勤務した後、この東清村に赴任したと言う。島の教育問題を中心に話を伺った。特に島が観光地化するとインターネットの情報も加わり、親が子供たちに伝統的な文化を教えることが少なくなった。男親は運動会に参加するが、授業参観に来るのは母親が多い。小学校は島内の各村にあるが、中学校は一つで高校に進学する者は台湾本島の台東の学校に行く。中学卒業後は仕事につくものが3割で、台湾本島に行く者が7割いる。レストラン関係の専門学校に行く者もある。島に戻ってくる者は少なく、本島で仕事を見つける若者が多い。子供たちは必ずしも貧しいわけではないが、島民が自給自足の生活に満足し物質に対する意欲が少ないため依然として貧しい状態にある。10年ほど前までは現地語で伝統的な生活をしていたが、現在ヤミ族の伝統的な家屋に住んでいるのは筆者が訪問した野銀村くらいである。台湾本島出身の女性と蘭嶼島の男性が結婚して島から女性が逃げると、残された子供をかつて近所の人は世話をしなかったが、今は大切な子宝として面倒を見ている。島の問題は時間が解決するので自分はそれほど悲観していないが、子供たちには多くの本を読んでほしいという教育問題を熱く語ってくれた。
- (19) この15歳から漁師をしている男性に一番問題となっていることを質問したところ漁業の後継者がいない点で、その不足分はインドネシア人などを雇っている。この他漁をするうえで影響を受ける不安定な天候の問題も大きいと言う。
- (20) 人口は2千人で約600世帯ほどでの漁業中心の村だが、この村では漁業で十分収入を得ているので若者の流出はそれほど問題になっていない。
- (21) この竹彎村の社区活動中心（センター）の建物には「澎湖懸西嶼郷竹彎社區相助隊・守望隊」という看板があり、ここが社区の安全を守る組織活動の拠点となっている。隊は10人から16人で構成され現在5つある。
- (22) 村の人口は刑務所の入居者を含めて8千人ほどで、世帯数は139ある。道教を信仰する者が多く、聞き取りをした新暦3月29日は旧暦2月29日で穢れたものを排除し地域の平安を願うため激しく爆竹を鳴らす祭りが行われていた。島の南寮、中寮、公館の3つの村で年1回同時に行う祭りで廟委員会が日にちを決める。中国の宗教は儒教、仏教、道教の「三教」とされるが、仏教はインド伝来の外来宗教、儒教は倫理道德を説く教学であり、道教のみが純粹の中国で発生した固有宗教と言えるが、その道教は長生不老という永遠の生命を求めて仙人になることを願う現実的な宗教とされる（劉, 1994）。17世紀の台湾で最初の漢人政権である鄭氏時代に始まり清朝末期まで続いた漢人の大規模な移動に伴い台湾に道教が伝わる。なおこの中寮村には村の下単位として隣（鄰）があり、隣長会議で保健衛生や環境について話をするが、問題があれば3村長が集まる村長会議で郷公所に伝える。
- (23) 中国本土浙江省温州市と福建省福清市の合会（標会）における掛金と給付金の仕組みは陳の論文が詳しい（陳, 2004）。
- (24) 『臨時台湾旧慣調査会第一部調査第三回報告書』（1910年）の「台湾私法第三卷付録参考書〈上巻〉」には一口4元20人で行った「會」をめくり支払いがされないための家具を没収した件に関する訴訟が出ている（臨時台湾旧慣調査会編, 1910, 264-270頁）。戦前日本の植民地時代から盛んに行われていたことがわかるが、それだけ裁判になるケースも少

なくなかったことがわかる。

- (25) この聞き取りをした60代の男性は戦時中望安にあった海軍の特攻隊第24震洋隊の基地について長年調べている郷土史家でもある。
- (26) 台湾のキリスト教は基督教（プロテスタント）と天主教（カトリック）に別れるが、この村のブヌン族は天主教を信じている。
- (27) この地域で一番大きくかつ微妙な問題が民族融和で、このためお互い交流し協力する機会を設けてきた。その一つが自発的に環境整備を共同でする「環境志工」である。しかし漢族の祭りに原住民が参加する、あるいは原住民の祭りに漢族が参加するという機会は少ない。
- (28) この村長に周辺の島を共有地（コモンズ）として利用し貧困者を救済する日本のモヤイ島のような制度があるか聞いたが、そうした仕組みはないと言う。
- (29) 中国人は「帮忙」を使う。なお高地のため水は山の水を使っている。60代の頭目は日本の統治時代は家と家が離れているため不便だったが、家がまとまるよう頭目の自分が努力して今日に至っていると言う。現在収入が少ないことが大きな問題で、子供は教育を身につけていい仕事についてもらいたいため、むしろ若者が台東市や花蓮市などの都会に出て収入を得てほしいと言う。週末の土日には戻って来る若者もいる。医療は関山という都市の病院を利用するので不便を感じていない。毎年6月にある「射耳祭」は弓矢や銃を使い祝っている。
- (30) この澎湖島の村で一番問題になっていることは、若者の都市への流出と人口減少である。これは他の島嶼地域共通の問題点である。
- (31) 緑島の将来について質問すると風が強いと船や飛行機が欠航し交通の便が悪い点、また台東県の予算が島に十分まわってこないこと、さらに島の雇用が少なく人口減少が大きい点を村長は指摘している。
- (32) この地域で問題になっているのは若者が都市で働くため少ない点、このアミ族の頭目も30代のとき台北で働き60代でここに戻ってきたが、地域の人口を増やすためにも若者の就労機会を多くしたいと言う。原住民の土地だった温泉を漢民族が奪った経緯もあるが、現在温泉に力を入れている。頭目自身は台湾人と原住民両者が協力して発展していくことを願っている。なお筆者が泊まった安通温泉飯店はもともと原住民の土地だったが、日本統治時代は日本人が経営していたことも聞いた。台湾の土地問題については矢内原に詳しい（矢内原, 1988 [1929], 14-19頁）。
- (33) このタロコ族の元牧師によると、結婚式のときはイノシシを10頭、葬式のときは1頭殺す。葬儀では故人の話をして忍ぶため普段仲が悪い者でも仲がよくなることがあると言う。なお山岳生活から平地に移ったとき、統治上の管理のため部落がつくられた。
- (34) この蘭嶼島の村一番の問題は島に仕事がなく、若者が台湾本島に行くことで人口が減ることだと言う。これも澎湖島や緑島同様だが、台湾本島内陸部の台東県海端郷利稻村のブヌン族の村落では土地の高低差はあっても都市に近いので、行き来が容易な都市への就労を奨励しているところと対照的である。
- (35) 明治13（1880）年の『全国民事慣例類集』（司法省蔵版）のように、近世以来の民事慣行が明治期に法体系（民法）の中に整理されたように、植民地期台湾でも現地人を理解しその統治のために様々な慣行を法体系の中に整理する一連の調査が行われたが、その役割

を担った組織がこの臨時台湾旧慣調査会だったと言ってもよいだろう。それは漢民族の「本島人」と原住民の「生蕃人」に対して、「内地人」としての日本人が統治するための調査である。日本の互助慣行が『民事慣例集』に初めて明示されたように、台湾でもこの調査報告書が同様の機能を担った。後述する臨時台湾旧慣調査会編（1913-14年）と台湾総督府蕃族調査会編（1917-21年）の『蕃族調査報告書』も同様の役割を担った。いずれも台湾総督府時代の台湾人と原住民の慣行を知る第一級の資料である。その多くが国立国会図書館で電子化され公開されている。

- (36) 宗族はより大きな血族であり、族はより小さな血族という区別がされている（臨時台湾旧慣調査会編，1907，285-290頁〈上巻〉）。
- (37) 蕃社は頭目、老番総代、老番、壮丁の4階級の社会で、このうち頭目は既に述べたように部族の長として知能優れ、記憶力もよく道理に明い者が自薦あるいは他薦で選ばれた。その役割は外部には自社を代表し内部には社民の安寧幸福を維持することにある（臨時台湾旧慣調査会編〈第2巻〉，1918，144-156頁）。頭目の専権事項は祝祭日の決定、道路修繕に関すること、社会の軽犯罪の裁定などで、土地係争や犯罪、頭目や老番総代の選任などは老番ないしは蕃社会議で決める。アミス族（台東県）では蕃社をニャロと称し、社民の階級は老年級、総年級、青年級、少年級の4階級に分かれる（同上，252-255頁）。頭目が蕃社内を統括し、通常は頭目と老番で決めるが、重要事項は蕃社会議で決める。その会議の集会所は社民共有の財産である。なお日本における台湾原住民の研究は日本順益台湾原住民研究会編の『台湾原住民研究概覧』（2002年）にまとまっている。
- (38) このツオウ族は『蕃族慣習調査報告書』ではソウ族と記載されている。報告書は漢称ではなく番（蕃）称を原則用いているが、もともと固有の民族名をもたなかったため、その民族のもとにある北ソウ番、タコブラン番、カナブ番、サアロア番の4つの部族が「人」を意味する言葉の類似性から学者がつけた名称を民族名として採用している（臨時台湾旧慣調査会編〈第4巻〉，1918，1-3頁）。各部族は言語、慣習が異なるところが多いものの、他の民族間ほどの差異が少ないため同じ民族に属するものとしてソウ族とされた。原住民部族の村落の代表は頭目だが、その下の単位に社があり規模の大きい大社と小さい小社（支社、分社、付属社）に分かれ、この数戸ないし数十戸の氏族単位の代表が世襲の頭人とされた（同上，237-258頁）。大社には頭人がいるが小社にはいない。頭人は頭目同様補助機関の老番と協力して「党」を統括し代表する。この集落の単位を示す言葉として『蕃族慣習調査報告書』では原住民の言葉がないため「党」を使っている。これが一つの共同生活圏であり自然村と言える。北ソウ番では4つの「党」があり、一つの「党」（ルフト党）は大社と一つの小社から成り、戸数25、人口310人である。
- (39) この高雄出身の大正13年生まれの男性は台湾統治期に日本軍の速射砲部隊に所属していた。日本の歴史に詳しく日本語ができるのは典型的な日本教育を受けた統治期の皇国青年と思われる。高地で空気がいいので自分は長生きしていることを語り、この点原住民のブヌン族は酒好きで40代や50代で亡くなる者が多いと言う。
- (40) この村長のお父さんは日本の学校で3年間勉強したが、そうした言葉を自分は聞いたことがないと言う。
- (41) サオ族の60代の女性が語った「自分たち民族の小米酒の製造技術を漢人が盗み大量に作ってきた」という言葉が印象に残っている（2014年8月聞き取り）。

- (42) 日月潭の九族文化村などの施設では原住民の文化がショー化して維持されているように思われる。
- (43) 森は「若し蕃人にして十分の理屈も分り意味も分りますれば、彼等の上には蕃の字は既に無いのであります。彼等が蕃人と云はれて居る代りには、既に夫等のものが理解する十分なる能力が無い為に蕃人と云はれ、それと共に今日では未だ彼等の人格は認められて居ないのであります」と言っている（森，1917，付録16頁）。長年原住民の研究に従事してきた森の思いがここには示されている。また首狩り族としての蕃族については、個々の聞き取り調査から彼らの真意を汲み取っている。それは「寧ろ神聖なる行為，男性的の行動として唯一の生蕃魂として一種神秘的の權威を認めて，彼等の心理状態の上に大なる潜勢力を有し之を以て最高の裁判即ち神の審判に依る採決と信じ，之に対する思想に斯かる境遇を脱せぬ為に」としている（同上，付録17頁）。このことは日清戦争後の台湾の割譲により日本領になったことによる日本人への服従と，それ以前の支那人の侵略に対して先祖の土地を守るという抵抗の姿勢がどこまでも持続した結果として「名誉の敗北」を得ても顔が立つことになるという部族性も指摘している（同上，18-20頁）。そこに慣習なり民族心理を研究する意義を認め，支配者と被支配者という関係ではなく，双方が土地（蕃地）の開発に際してパートナーシップの関係を築き，原住民の「誠」を信じてこちらもその「誠」で応えることが大切であると主張する森の蕃族研究の信念を見ることができる。

参考文献

- 陳玉雄，2004「中国東南沿海部における『合会』の実態とその金融機能—浙江省温州市と福建省福清市の『標会』の事例比較を中心に—」『中国経営管理研究』第4号，23-47頁。
- 伊能嘉矩，1928『台湾文化史』（上巻・中巻・下巻）刀江書院。
- 森丑之助，1917『臺灣蕃族志』（第一巻）臨時臺灣舊慣調査會。
- 日本順益台湾原住民研究会編，2002『台湾原住民研究概覧』風響社。
- 恩田守雄，2006『互助社会論』世界思想社。
- 恩田守雄，2008a「日本とベトナムの比較互助社会論」『経済社会学会年報』第30号，32-49頁。
- 恩田守雄，2008b「ベトナム人の社会意識—村落生活実態調査を中心に—」『社会学部論叢』第19巻第1号1-90頁。
- 恩田守雄，2012「韓国の互助慣行—日本との民俗社会学的比較—」『社会学部論叢』第23巻第1号，1-44頁。
- 恩田守雄，2013「中国農村社会の互助慣行」『社会学部論叢』第24巻第1号，25-60頁。
- 臨時台湾旧慣調査会編，1903-7『臨時台湾旧慣調査会第一部調査第一回報告書』（第一回上巻）（1903），〈第一回下巻〉（1903），〈第二回第一巻〉（1906），〈第二回第二巻上巻〉（1907），〈第二回第二巻下巻〉（1907），臨時台湾旧慣調査会。
- 臨時台湾旧慣調査会編，1910『臨時台湾旧慣調査会第一部調査第三回報告書（台湾私法第三巻付録参考書）（上巻）』，臨時台湾旧慣調査会。
- 臨時台湾旧慣調査会編，1913-14『臨時台湾旧慣調査会第一部蕃族調査報告書』（第一巻）（1913）阿眉族・卑南族，〈第二巻〉（1914）阿眉族，臨時台湾旧慣調査会。
- 臨時台湾旧慣調査会編，1918『蕃族慣習調査報告書』（第二巻，第三巻，第四巻）臨時台湾旧

慣調査会。

臨時台湾旧慣調査会編，1920-29『蕃族慣習調査報告書』（第五卷の一，三，四，五）台湾総督府蕃族調査会。

劉枝萬，1994『台湾の道教と民間信仰』風響社。

台湾総督府蕃族調査会編，1917-21『台湾総督府蕃族調査会蕃族調査報告書』（『臨時台湾旧慣調査会第一部蕃族調査報告書』の改題），〈第一卷〉（1917）紗績族，〈第二卷〉（1918）太ㄤ族前篇，〈第三卷〉（1920）太ㄤ族後篇，〈第四卷〉（1921）排灣族・獅設族，台湾総督府蕃族調査会。

矢内原忠雄，1988 [1929]『帝国主義化の台湾』岩波書店。